今日もウシ市で同じく仕事のない友人たちとおしゃべりをしている．ただ，以前と異なるのは，彼はもう市に連れてくるウシを持っていないし，彼にウシの輸送や飼養を頼む人もいないということだ．

わたしは，彼が本当にウシを勝手に売ったのか，なぜそのようなことをしたのか，いまだ聞き出せずにいる．ウシ市で彼と再会の握手をした日，陽気な挨拶とは対照的に周囲から避けられている彼の表情は少し曇っていた．その目が，「自分は何もやっていない」と伝えていたのか，それとも外部者のわたしに「仕方なかったのだ」と理解を求めていたのか，わたしにはわからなかった．

それとも，華やかなウシ経済を下支えする牛飼いたちの生活苦やその仕事の大変さがほんの少しわかったことで，彼に同情しているのかもしれない．いずれにせよ，それ以来，ウシ市や街中で彼を見かけるが，まともに話もできていない．

今日も，ウシ商人たちが賑やかにやりとりする市の片すみで，ウシを捨てられない彼はおしゃべりで暇をつぶしている．いつか自分のもとにウシの仕事がかえってくるのを待っているのだろう．すすまない調査から逃げるようにおしゃべりに参加するわたしよりも，少しばかり真剣に，そして切実に．

自己のなかの「他者」と向き合う

──月経経験のオートエスノグラフィーへ向けた試み──

荻　野　なつれ *

ウシと鶏の鳴き声で目が覚めた．起床後すぐに向かったお手洗いで，自身のショーツに滲む経血に，こころのなかで「このタイミングかぁ…」と呟き，肩を落とした．

ラオス人民民主共和国（以下，ラオス）の首都ヴィエンチャンから北へ車で約 2 時間，この調査地とも気付けば 4 年の付き合いとなっていた．稲作や家畜飼育を主な生業とするこの村で複業的におこなわれているのが，タケやラタンを用いたタケ籠や腰掛けイスなどの手工芸品製作だ．タケ籠を編む技術，女性たちが集って製作をする光景に惹かれ，日々，タケ籠に用いるタケの種類や技術習得の過程，それらの販売経路に関する情報を集め，自らもタケ籠を編む技術を学びながらフィールド生活を送っていた．

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

製作者個々人をもっと知りたいという思いからも，そろそろ調査へ本腰を入れねばという焦りからも，ひとまずスポット・チェック調査[1]に取り掛かろうと思っていた矢先に，朝一の落胆である．手工芸品製作に関する語彙も増え，調査へのモチベーションが絶頂に達していたところで現れた月経は，やけにやる気を削いでいった．調査中に生理用品を自由に交換できる時間や場所は確保できそうかという心配や，急にやってくる生理痛や倦怠感への不安といった，この先たった数時間の緊張感が拭えず，この日は調査手法を変更し，スポット・チェック調査は数日後に延期することにした．

月経がきたことを認知したからなのか，不思議と気持ちがだるかった．いつもよりのんびり身支度をしていると，向かいに暮らすおじさんに「どうしたのか，今日は仕事（＝調査）に行かないのか？」と声をかけられた．「ちょっとお腹痛くてさ」と答えると「ナット（＝執筆者の愛称）は昨晩のラオス料理が合わなかったのだなー！ハハハ」と笑われた．

日本からフィールドへ持っていく荷物は極力減らしたく，生理用品などの消耗品は基本的に現地購入と決めていた．生理用品を買いに行けば，商店を営む馴染みのおかあさんも，行きしな，帰りしなに会った村びとも「ナットに月経周期がきたこと」を口にせずとも知るのだ．自宅に戻り，お世話になっているおねえさんに「生理きちゃった」と伝えると，「お腹痛む？今日は家でゆっくり休んでいな」と言われた．

しっかり身体を休めたほうがよいとは分かっていても，やはりひとの家，そしてフィールドワーク中だ．月経期間中は横になっているときや就寝中の寝返りによる経血漏れにも必要以上に気をつけ，無駄に気疲れがする．さらに，せっかくフィールドにいるのに外へ出かけず部屋で休んでいることに対する罪悪感もどこからか生まれてきてしまった．そんな気持ちをちょっとでも蹴飛ばしてやろうとひとまず起き上がり，手始めに汚れたショーツを洗いながら，経血がベッドシーツに滲み出ていなくてよかった…と改めて安堵した．月経初日～２日目は経血量が多いことも考慮し，快適に生理用品を交換できるよう比較的自宅に近い場所での参与観察をおこなった．

普段であれば明るく振る舞い，楽しんで受け入れることができるラオ語の発音の不十分さに対する子どもたちの揶揄いや，村びとのお手伝いを求む声，お酒の場では比較的寛容になれるスキンシップにも，やけに過剰に反応してしまった．常に最大限の優しさで現地調査をサポートしてくれるフィールドの人びとにイライラしてしまう自分，いつもなら気丈に振る舞えるはずの「自分ではない自分」にさらに腹が立つのであった．

1）動物生態学（行動学）の分野で発展した，人間の活動を客観的に観察し記録するために，観察日時や観察対象をランダムに選定しておこなうタイムアロケーション（時間配分）研究の方法［大塚 2011: 70］．この日は，ランダムに選んだ 3 世帯を朝 8 時～夜 8 時まで毎時間ごとに訪ね，都度どの世帯要員がなにをしているのかを記録することを試みていた．

そして日が暮れれば，多少の気疲れを抱えつつ，翌朝にショーツとベッドシーツを洗う必要がないことを願いながら眠りについたのであった．

月経は，女性の子宮内膜が周期的に剥がれ，血液とともに体外に排出される生物学的事象である．その一方で，月経期間前後のホルモンバランスの変化にともなう身体的不調や精神的不調，月経期間の不特定性や不確実性という点では，どうにもコントロール不可能な側面をもつ．それゆえに，「自分ではない自分」に腹が立つ…なんてことが起きるのである．だからといって，月経がきたらイライラしないように気をつけよう！というのはまったく役に立たない試みである．今回の月経が激しい生理痛をともなうものなのか，ひどく気分が落ち込むものなのか，特にこれといった不調がなく元気に過ごせるものなのか，月経は周期によって全く違う顔をみせてくる．ホルモンバランスが原因だと分かっていても，もしくは，実際には表立って身体に不調をきたしていなくても，生理がきたことを知らせるショーツに映る経血を思い返しただけで，不思議なもので気持ちが乗らなくなってしまう．なんとも，誰かに情緒を左右されている気持ちになる．自らの身体に起こっていることでありながらも，そのときどきの体調や気持ちを十分に理解することができない月経は，いわば「自己のなかの他者」なのではないだろうか．女性たちは，月に 1 度，自身のなかにどうにも飼い慣らすことのできない他者と共生しているのである．

写真 1　タケ籠を編む執筆者

改めて記述するまでもないことだが，元来より，人類学や地域研究の領域では中～長期間のフィールドワークを通じて，現地の人びとの視点から彼らの社会を捉えようと試みてきた．国内外を問わず異文化に身を置き，人びとととともに生活することをとおして，調査者自身の生まれ育ってきた環境や社会との差異を知覚し，フィールドと自らとの「あたりまえ」の見つめ直しをおこないながら，自らがもつ「あたりまえ」の枠組みの可変性と向き合ってきたのである．とはいえ，異文化である．調査はもちろん，コミュニケーションひとつをとっても，うまくいくときとそうでないときがある．いや，むしろ，ほとんどがうまくいかない…．それでもフィールドワーカーらは，彼らを理解しようと熱心にフィールドとの対話を繰り返してきた．

この便りも終盤となってきたが，ここで執筆の目的を記しておこう．これは，フィールドにおいて研究者が経験する異文化やそれにともなう「うまくいかなさ」と，自己のなかにいる制御不能な異文化の他者である月経との関係性を再確認し，オートエスノグラフィーを模して記述してみようという試みである．オートエスノグラフィーとは，自己（auto），文化（ethno），書く（graphy）から成り，個人的で文化的な経験をどのように知り，名づけ，解釈するようになったのかを表現する，自己の／自己についての記述である［アダムスほか 2022: 1–49］．フィールドと月経，2つの異文化と自己との交わりをエスノグラフィーとして描くことをとおして，フィールドへ赴く自身や身体との付き合いかたを見つめ，翻って異文化を理解しようと試みる自分自身の理解を深める手助けになることを目指している．

ひとの生涯において，自己のなかに他者が登場することは男女問わずあるのではないだろうか．妻や夫，母や父としての自己，思春期，更年期障害，思いがけない病やどうにも避けられない老いによって気持ちや身体がいうことをきかないこと…，私たちは人生においてさまざまな節目や経験を迎える．そのときどきにできること，できなくなっていくことなど，自己に包括される身体の調子や社会的役割は必ずしも単一なものではない．研究者らが，うまくいかないながらも丁寧に異文化であるフィールドとの対話をおこなってきたように，わたしたちも自己のなかにいる他者との対話から新たな社会の見方を生み出すことができるかもしれない．

さて，ここまでお付き合いいただいた読者のみなさんは，フィールドにいる自らの存在を振り返り，女性の読者のみなさんは，これまでの月経経験のなかで現れてきた「他者」の存在を思い返してみたのではないだろうか．インゴルドは人類学における参与観察について，他者に注意を払うこと，つまり他者がすることをよく見て言うことをよく聞くことによって，人びとについての研究を生み出すというよりも，むしろ人びとととともに研究する，と記述する［インゴルド 2020: 16–17］．彼が言うところの「他者」には，フィールドにいる他者に加えて，自己のなかに突如として現れる他者が潜んでいるのかもしれない．この便りをとおして，さまざまな他者と交わり合いながら暮らす日常や，自己のなかに潜む他者に眼を向ける契機を与えられていれば幸いである．

引用文献

アダムス，トニー E.・ジョーンズ，ステイシー ホルマン・エリス，キャロリン．2022.『オートエスノグラフィー―質的研究を再考し，表現するための実践ガイド』松澤和正・佐藤美保訳，新曜社.

インゴルド，ティム．2020.『人類学とは何か』奥野克巳・宮崎幸子訳，亜紀書房.

大塚柳太郎．2011.「人間活動と生業適応」渡辺知保・梅崎昌裕・中澤港・大塚柳太郎・関山牧子・吉永淳・門司和彦『人間の生態学』朝倉書店，69–81.